平賀源内の浄瑠璃

――お舟の恋心の行方――

福田安典

エレキテルで知られる平賀源内は、本業は本草学者であるが、マルチな人であって、風来山人の名で小説も書き、おもに福内鬼外の名で浄瑠璃作を残している。本論ではその浄瑠璃作品を取り上げるのであるが、浄瑠璃作者としての平賀源内の評価はさほど高くはない。[1] 早くに馬琴が『近世物之本江戸作者部類』で「浄瑠璃の新作もて一時に都下をさわがしたり」と証言し、水谷不倒翁も「本草学者より一足飛びの浄瑠璃作者にして、くろうとの作者を壓倒す。これを見ても源内が才の非凡なりしを察すべし」（『偉人史叢　第六巻　平賀源内』明治二十九年、裳華房発行）と評したが、以後はどちらかと言えば低評価が多く見られる。その大きな理由は、先行の浄瑠璃作品の焼き直しが多いこと、「江戸っ子」に迎合した要素が多いという点である。源内を評価した水谷不倒翁でさえ「神田明神、あるひは浅草観音、さては六郷近傍の新田明神などの縁起を説くなど、江戸ッ児のよろこぶところ、作者の如才なきを知るべし」と記している。本論では、その評価が低い平賀源内の浄瑠璃作品を敢えて取り上げる。

1　源内の浄瑠璃作品

源内の浄瑠璃作品は以下である。

1　神霊矢口渡　明和七・一・一六、外記座、補助、吉田冠子・玉泉堂・吉田二一。
2　源氏大草紙　明和七・八・一九、肥前座、単独作。
3　弓勢智勇湊　明和八・一・二〇、肥前座、補助、吉田仲治
4　嫩榕葉相生源氏　安永二・一・二、肥前座、単独作。
5　前太平記古跡鑑　安永三・一・一二、結城座、単独作。
6　忠臣伊呂波実記　安永四・七・一五、肥前座、単独作。
7　荒御霊新田神徳　安永八・二・八、結城座、合作者＝森羅万象・二一天作。
8　霊験宮戸川　安永九・三・三、肥前座、単独作
9　実生源氏金王桜　寛政一〇・六・五、肥前座、単独作。

今日も文楽や歌舞伎で上演されるものは『神霊矢口渡』（以下『矢口渡』）なので、辛うじて『矢口渡』だけは合格点を与えてもよいのかもしれない。しかし、子細に上演記録を眺めれば、『矢口渡』以降、源内没後の九作目を除いても七作品が興行にかかっているこ

とになる。しかも、わずか十年の間にである。この十年は、源内の作品がなければ江戸の正月や盆は寂しいと言わざるをえない状況ではなかろうか。源内の作品が本当に駄作揃いであれば、この十年の「江戸っ子」はまことに「見巧者」ならぬ「見下手者」ばっかりだということになろう。しかも源内没後二十年ほど経っても、未完の『実生源氏金王桜』が上演されるなど、江戸っ子の見下手ぶりは徹底している、と言えないのは明確であろう。源内の作品が面白い「名作」であることをイヤでも認めなければ、この盛行は説明できないはずである。

ここで、この時期の江戸浄瑠璃（上方に対して、以下も同じ意味に使う）の作劇法を考えてみたい。明和八年六月二十八日渡辺桃源宛ての源内書簡には、

小豆島、大阪でからくりをせねは今頃は江戸へ参、何ぞは手に入候得共、金が敵の世の中にて御座候。桃源公之無益之作文とは浄瑠璃之事に候や。去々年もかな川にて金子五両請取書遣、夫を路金に大阪迄登り申候。右之板本致候故植村善六留守でも夏物質でも誓て長崎へおこしたり。万端世話いたし呉候。京ノ店も右同然に御座候。大儒先生之詩文集でも売ねば本屋は難有がり不申候。今でも芝居の金は取不申候得共、本屋より頼は書遣候。金にならねは引込申候。此間も二切書て江戸へ遣、七両なら跡をやらふと本屋へ申遣候。是等も不得止之謀に御座候。毎々浄るりにも助られ申候。

とある（傍線部、筆者）。この書簡についてはすでに論じたことがあるが[2]、必要なことを再説すれば、長崎からの帰りに源内は大坂に逗留、金銭困窮を故郷の知己に訴えたものである。傍線部の無益の作文は『源氏大草紙』、『弓勢智勇湊』のいずれかであろう。その正本の版元が植村善六こと伏見屋善六で、あれこれ源内の面倒を見た書肆である。そして、稿料を七両までつり上げて江戸へ送った「二切」は、『嫩榕葉相生源氏』か『前太平記古跡鑑』のいずれかであろうが、『嫩榕葉相生源氏』の後序に、

予か戯に作る嫩榕葉相生源氏九段続きなるを、東都の芝居の習なれば、末の三幕を残し置き、評判しだひにて猶追々に出さんと先づ六段目まで取り組みけるに、当正月より如月下旬の今に至るまで引き続きての大入、

と明確に記されている（句読点や用字は一部改めた）ので、一応『嫩榕葉相生源氏』の二段目までを書いたと取っておきたい。これは源内の人気を証明するとともに、この時期の江戸浄瑠璃の作劇プロセスを語る一文としてしばしば引用されている[3]。つまり、この時期の源内の作劇法は始めから、初段から最後まで作るものではなかった。途中までの数段だけを作ればよく、観客もそれで満足していた。その「中途半端」なもので評判がよければ、本屋は何両も出して続きを出版したのである。この作劇法は江戸っ子がそのサワリだけで秀作か愚作かを判断することができたという、極めて都会的かつシビアな鑑定者であったことを反映してのことであろう。これは彼らが「見巧者」であったことを示す以外の何ものでもなく、決して源内の下拙さを示すものではないはずである。それを、後の評価軸、すなわち初段から最終段までの結構で作品論を語るのは「近代人」の悪弊ではなかろうか。源内の晩節は浄瑠璃作者として輝いていたのであることを素直に評価しなければならない。

2　『荒御霊新田神徳』

源内が浄瑠璃作者として迎えられていたことを前提として『荒御霊新田神徳』（以下『新田神徳』）を論じたい。この作品は源内の生前最後に上演された作品である。本作は自身のアタリ作『矢口渡』の後日談で、時代を貞治二年三月に設定している。登場人物の源義詮は足利尊氏の子、竹沢宗時は監物の弟といった具合に、先行作より一世代ずらしている。新田義岑を中心に管領畠山義深の悪事に、近江の佐々木家のお家騒動を絡ませ、新田明神の神徳を称えるものである。梗概は以下である。

管領畠山義探は、近江の国守佐々木秀詮の娘初花姫を妻に求めるが、姫は新田義岑と相思なので、拒否して侍女狭衣と流浪する。畠山は佐々木家の横領を企む多賀将監と気脈を通じ、秀詮を暗殺。同家の宝物「雨降の玉」を奪い、秀詮の嗣子衣紋之介秀頼を殺そうとするが、新田明神の神徳によりまぬがれる。一方、初花姫は大森村の道念の庵室で義岑と出会い、先行作『矢口渡』で義岑への純愛から非業の死を遂げた「お舟」の霊により、両者は恋に落ちる。その後、艱難辛苦を乗り越え、入間郡山口観音で義岑と初花姫がお舟の菩提を弔う、というものである。

咄本的な要素、本草趣味、大黒舞、大坂生玉万歳、中村仲蔵や杉田玄白の名を出すなど、細部にも仕掛けや配慮がある。

本作品には次の後序がある。

近松老翁世を戯場に辟て、数の浄瑠璃を作けるに、筑後、播磨の名人有ツて普く世上に行渡、勧善懲悪の世を教るの一助たる事、是近松氏の本心なり。中頃、千前軒文耕堂が類も亦近松氏の意を請て、作れる所正しければ此道甚盛なりしが、いつの頃よりか衰て、今時の作者は固そこ所ではなく、文法をしらず、手尓於葉を弁へず、嘲を遠近に伝へ、耻を千歳に残す。

近松門左衛門、竹本筑後掾や播磨掾の名人、後代の千前軒や文耕堂を得て完成した人形浄瑠璃の「本心」は勧善懲悪であり、その系譜に自身も連なりたいと語るこの跋文が今まで問題とされたことは少ない。いつもの源内風の軽口であって、源内がまさか本気で浄瑠璃に専念したとは考えにくいのがその遠因であろうかと推量する。しかし、この晩年の時期源内は「已に賢るのむだ書に浄瑠璃や小説が当れば、近松門左衛門・自笑・其磧が類と心得」（安永六年『放屁論後編』）、「剣術者ならば僧正坊、学問ならば文宣王、役者は海老蔵、作者は近松」（安永八年『金の生木』）などと記し、近松へのレスペクトを隠そうとしない。意外にも近松の後を追おうとしたことは認めてもよいであろう。その意味ではこの『新田神徳』は注目すべき作品と言えそうである。

にも拘わらず、本作はへの言及は少なく、あったとしても、「全體は散漫であつて、作柄は矢口より遙に劣る」という黒木勘蔵の辞書的記載や、源内の浄瑠璃執筆を「第二義的なもの」[(4)]と断罪した城福勇が「彼の息切れが感じられる」と評するような寂しいものしか見当たらない。

確かに、本作は源内にしては珍しく合作であって、しかも最終段「天津空誓ひの櫻」には「此段いまだ書不申フシ付相定らず候追て相改取替差上可申候」という割り注があって、実際にフシ付けが施されないまま刊行されている。時に源内五十二歳、人生に疲れ、狂

気を発し、非業の最期を遂げる直前であった。

しかし、生活苦、社会との軋轢、迫り来る狂気の中で執筆された『新田神徳』の世界を分析してこそはじめて平賀源内という作家の精神が解明できるであろう。本稿では『新田神徳』に切り込み、次いで本作が後の文芸に与えた影響について考察してみたい。

3　山口観音

源内の浄瑠璃は「江戸っ子」に迎合し、彼ら好みの話題や場所を提供することに特徴のあることが早くから指摘されている。『新田神徳』に於いては、第九段「山口観音の段」の山口観音がその役割を背負っている（以下、引用は適宜用字を改め、句読点や「　」、濁点などを施した）。

抑々是は武州入間の郡、山口観音利生の道場。此吾庵の窟に禅居を占め、瑜伽の門派に濫吹せる、求道の沙門上生とは我事なり。

義岑と初花姫が追っ手から遁れて逃げ込んだのが吾庵山金乗院山口観音の上生の庵であった。上生は上生庵亮盛（以下、亮盛）のことで、享保八年生、享和三年に八十一歳で歿した実在の僧侶である。[5]『坂東三十三所観音霊場記』（明和八年刊）、『筑波山名跡誌』（安永二年自序）、『三社託宣一毛鈔』（安永四年刊）、『大黒宝嚢記』（寛政五年自序）、『東都六地蔵巡礼記』（文化三年刊）などの著作がある。志道軒や杉田玄白同様に実在の人物を登場させたのである。

源内が実在の亮盛および山口観音を選んだ意図は何であろうか。まず考えられるのが、この山口観音が新田義貞ゆかりの寺院であったことである。この寺院には新田義岑の父義貞の「誓いの桜」（の子孫）が現存している。その由来を『新田神徳』から引いてみる。

「此桜を父義貞の誓の桜と名に呼因縁、物語られよ」と有りければ、阿闍梨ハツト袖かき合せ、「夫れ我寺の本尊千手薩埵の霊像は、人皇四十五代聖武帝の御宇、神亀五年行基菩薩、此地に来りて観音の影向を、写し影める尊像なり。其後我祖師弘法大師、是も不思義の告有て一宇の堂を草創有。或時、国に疫癘はやり、諸人のなやみ人種も尽る計の事なりしを、一人の老僧有て吾庵の観音に祈りを懸けよと教へに任せ、人々爰に来りつゝ、祈れば忽平癒せり。民の歓び大方ならず。彼老僧の吾庵と教へ給ひし詞により吾庵山と号けたり。扨又誓ひの桜とは、去る元弘三年に御父君義貞公、相模入道を亡ぼさんと、上州より義兵を発し、分梅河原の一戦に、利を失ひて引退き、此寺に御通夜有り一紙の願書を捧げらる。其夜の夢に観世音御手の弓矢を授け給ふ。義貞公は夢覚めて心に誓、庭前の桜の枝を鞭となし鎌倉に馳せ向ひ、相模入道一家を亡ぼし、辰襟休め奉る。去るに依て此一と木を義貞公の誓の桜と申事、此謂れにて候」といとも委しき物語。

この記述は次の亮盛の『板東三十三所観音霊場記』巻十に拠っている。長文なので源内が取り込んだ箇所のみを引いておく。

夫我寺ノ本尊千手大悲者ハ（中略）皇統四十五世聖武帝ノ馭宇、神亀五年戊辰ノ春、行基大士諸州ヲ遊化シテ此地ニ至テ（中略）彼ノ影向ノ霊木ヲ伐テ、終夜感見シ奉ル尊容ヲ模シ彫ミ（中略）人王五十二代嵯峨帝ノ弘仁年中、我ガ祖弘法大師（中

略）一宇ノ艸堂ヲ営ミ、件ノ尊像ヲ安置シ奉ル。此当寺草創ノ因由也。

昔シ武相ノ間ニ疫癘ハヤリ（中略）、一人ノ老僧アリ。毎人ニ告テ曰ク、吾庵ニ大悲ノ霊像在ス。詣デ祈ン者ハ、必ズ此疫災ヲ除クベシ。夜闌テ樹頭ニ光アル所、是レ吾庵ナリト。（中略）権僧ノ吾庵ト云詞ヲ取テ、山ヲ吾庵ト名ク。

元弘三年酉ノ五月、新田左中将義貞卿、上州ヨリ義兵ヲ発シ、旗ヲ武埜ニ挙玉フ。府中分梅河原ニ於テ、始テ鎌倉勢ト対戦ニ及ビ、敗テ久米川村ニ退キ、当山東シノ嶺ニ陣宿ス。此ノ時義貞大悲前ニ於テ、一紙ノ願書ヲ捧ゲ、朝敵退治ノ武功ヲ祈リ玉フ。一夜大将義貞ノ夢ニ、観世音馬上ニ在テ、御手ノ弓箭ヲ授ケ賜フ。義貞驚キ覚テ、大キニ喜ビ、深ク大悲者ニ祈誓シ、庭前ノ桜ノ枝ヲ策トシテ、勇デ関戸ノ陣ニ馳向玉フ。而ニ越後信濃ノ方ヨリ、頻ニ数万ノ軍勢走加ハリ、不日ニ、相州一家ヲ亡シ、辰襟ヲ安ジ奉ル。彼桜于今栄ヘテ、義貞公盟ノ桜ト云。

すなわち源内は亮盛を登場させるのみならず、出版されたばかりの彼の著書も作品に取り入れたのであった。その適宜性というか時宜を読む速さはまさに源内の源内たる所以である。とすれば、この山口観音もまた江戸っ子にとっては時流に適った話題性があったと見なければならない。実は山口観音は宝暦年間に亮盛によって建立、その財政補填のために宝暦十四年（明和元年）に江戸の本所回向院で出開帳が設けられた。出開帳は当時の江戸にあっては一大遊興であって、しかも回向院はその代表場所であった。江戸に来たばかりの源内もこの山口観音の出開帳を見た可能性は高く、また江戸っ子の記憶に新しい、その話題性を踏まえて山口観音を選んだものと思われる。

これは『矢口渡』を考える上でも示唆的である。『矢口渡』成立については、新田神社荒廃を源内が救ったという説と、新田神社流行に源内があやかったという対立する説があり結論をみていない。[6] 山口観音を源内が選んだ理由がその話題性であったことを考えれば、新田神社との関係もそう考えるべきであろう。また、源内と寺社との相乗効果は認めてもよいかもしれない。

ちなみに、この山口観音は後に土山宗次郎出奔事件の際に平秩東作が土山を匿った場所であった（鈴木白藤『鳩溪遺事』『莘野茗談』）。源内が落人の匿い所として描いた山口観音が現実の舞台となったのである。源内と交流のあった土山や東作のこと、両者が『新田神徳』に想を得たとすればおもしろいが推測の域を出ない。事実の指摘にとどめておきたい。

4　お舟の恋の妄執

『新田神徳』のヒロイン初花姫が義岑との恋に堕ちる場面は以下である（傍線、筆者）。

「何事やらん」と義岑公、道念諸共立出給ふ。姿見るより狂ひ人は、「ノフなつかしや義岑様」とすがり付ばこなたも恟り、「ム、、見ればやん事なき上臈の、物狂はしきは。ム、ヱ、扨は恋人をしたひこがれし狂乱か。又は物の見入れ成か。去ながら終に逢たる事なければ、知人ならぬ某を、義岑と呼懸しは。ハレ心得ず」とふ審の躰。「ノフ恨めしの仰やな。君に思ひを

かけしより、いつそ命を捨小舟。心は千船百船や。棚なし小舟ゆらのとを、渡る船人楫をたへ、行衛もしらぬ物思ひ。父の心を荒浪に身は浮舟のとも綱も、切てめいどへ出船の宙有の旅に、うかれ船、弘誓の舟に乗も得ず、浮みもやらず、うか〳〵とあこがれこがれ来りたり。親と一つ所でないといふ。一つの功を立るなら未来で添ふとおつしやつた。詞は嘘かいつわりか。むごい難面どうよく」と前後もわかず抱き付かつぱと臥て泣ゐたる。義岑公は人しらぬ其かねごとの覚有。胸にせまりて忙然と、詞も泪にくれ給ふ。乳母狭衣もふしん顔。「コレ申、道念様。先程から取紛れ。御挨拶も申ませぬ」「ヲイノわしも先から遠慮して態と扣へておりました。こなたがお供と見へたれば」「アイ是成は私が御主人、佐々木近江判官様の御息女初花姫、今日弟御衣紋介様、此お宮へ御代参、兼ねて御信仰の御神ゆへ、姫にも参詣。道よりも不慮の病気、どなた様か存ませぬが、あなた様へひよんな御世話。御免なされて下さりませ。申道念様。先き程矢口の渡場から。寒け立しと申されしが、夫レから俄の此狂気。どふした事でござりませふ」と。聞いて道念思案顔「ム、ハ、、夫レで聞へた。夫レなれば訳の有事。ハア若ひ娘の一筋に思ひ込だ一念。うかみもやらす姫君に乗移り恋慕ふ。アヽいとしや。南無阿弥陀仏〳〵」と、回向の声に皆恂り、「スリヤ姫君の物の怪は」「ヲイノ渡し守の頓兵衛が娘、お船が死霊に極まつた。ハヽきやつもやぼではないかいの」といふに猶しもあきれゐる。

（第二　矢口村神前の段）

すなわち、前作『矢口渡』で非業の死を遂げたお舟（お船とも書くが本稿ではお舟で統一）の妄執が死霊となって初花姫に取り憑き、恋に堕ちたと設定されているのである。

お舟は『矢口渡』中で人気のある女性であって、渡し守頓兵衛の娘である。極悪非道の父を持ちながら、純粋一途な「おぼこ娘の一筋に思ひ乱」れる性格で、逢ったばかりの義岑に一目惚れし、その愛する義岑を（及びその恋人・台も）助けるために命を投げ出す。そのけなげさは現在も文楽や歌舞伎の見せ所となっている。

しかし、この性格の理解や役所は難しいようである。お舟は、義岑に惚れた際にもいきなり「連れの女中様は妹御でござんすか。お内儀様でござんすかへ」と単刀直入に切り込み、妹だと誤魔化した義岑の言葉を信じ込み、「右よ左と付け廻す」。このあたりが「琥珀の塵や磁石の針、粋もぶ粋も一様に、迷ふが上の迷ひなり」という源内の名文とともに喧伝されている。その後に義岑とお舟はなぜか急に抱き合うが、お舟の父が義興を殺害した張本人であったので新田の旗の咎を受けて両者とも気を失う。所詮は一緒にはなれず、しかも嘘をついていた義岑のために、「なぜ」かお舟は父を欺いて義岑を逃がし、身代わりとして実父に刺され折檻までされる。その上、息絶え絶えの状態で六蔵という男と大立ち回りの末に六蔵を刺し、櫓の太鼓を打ち鳴らして義岑が逃げるのを助けたのであった。この「なぜ」は単に「おぼこ娘」の一言では説明できない。はまり役を演じた七代目澤村宗十郎でさえ、

ところでこれが処女娘どころか、あのくらい蓮葉な娘は、他の狂言にも滅多にないもので、（中略）たとい船頭の子としたところで、十七八の娘の言草、仕打ではないと思いますから、ここを第一に考えて性根を据えて演らなければならないと思います。

と語っている[7]。松井敏明も、

お舟にはそれほどの哀感が感じられない。もっとも、お舟の犠牲には父親を改心させるためという目的もあるのだが、なにしろ恋が一目惚れでしか過ぎないところに、観客はやはり若干の無理を感じてしまうのである。

と評している[8]。

お舟の行動はすべて義岑の、

兄を殺せし頓兵衛が娘故、此世で添事ならね共、親と一所でないといふ、一つの功を立るなら、未来で添ふ。

という一言による。その一言に縋った恋心ゆえであった。たとえ、現代の目からは薄っぺらに見えようと、この言葉がお舟を衝き動かしていたのである。そして、源内もこの言葉を忘れてはいなかった。先掲『新田神徳』引用文の傍線部、お舟が死霊となって出た際にも、この義岑の言葉が繰り返される。お舟は死して悪霊となろうとも義岑のこの言葉が忘れられず、妄執のあまり初花姫に取り憑いたのであった。

すなわち、源内の浄瑠璃への低評価が「所詮は余芸」だとする彼のやる気の無さに求められることが多いが、ことお舟については、義岑の一言をずっと信じたままの姿で、源内の脳裏にはいつまでも生き続けていたことを認めなければならない。それは余芸にすぎないという低評価を真っ向から否定すべきものであろう。

さらに、このお舟は後段になっても姿を現す。それが山口観音の段のエンディングである。長文だが源内の名筆と称すべき文章であるので引いてみたい（傍線、筆者）。

「赦して下されお船殿」と絵像に取付すがり付。声の限りを泣尽すはいた〳〵しくも哀なり。もゆる火の薪は仮の容にて、空より出て又空に帰り兼たる輪回の紲。お船が姿あり〳〵と影のごとくに顕はるれば。夫レと見るより初花姫。こはさ悲しさ身はわな〳〵、恐れおの〻き振ひゐる。「ア、ラ閻浮恋しやなつかしや。さなきだに女は五障三従の罪深き身をいかなれば、父の悪逆邪より、さしも名高き名将の義興様を害したる、悪の報ひは針の先。夫レとは知ず義岑様のお姿を見初めしより、迚も女に生る〻なら、あんな殿御に添たいと、思ひ余りてやう〳〵とやさしいお詞聞嬉しさ。お側へ寄れは浅ましや。御ン旗のとがめにて正気を失ふ悶絶も、恐れすこりず附まとへど、兄を殺せし敵の娘、此世で添事ならね共、親と一つ所でないといふ、一つの功を立るなら、未来で添ふのお詞を、せめて此世の思ひ出と、御身替りと覚悟して、刃に懸り死たりし、邪婬の悪鬼は身を責て、其念力の、道もさかしき剱の山の上に恋しき人はおはすれ嬉しやとて、よぢ登れば剱は身を通し磐石は骨を砕く。鉄杖ふり立牛頭馬頭の呵責の声は天地に響き、百千万の雷の一度に落る苦しさこはさ。猶其中に魂のしたふ一図に漸と、お前の姿を仮初に義岑にま見へしより心の迷ひいやまして益々つのる地獄の責。母は先立父は猶、同しく地獄の奴となり、兄弟迚もあらかねの土に印の塚もなく、只一ト口の念仏を手向る人も有ざれば、億万却をふる迚も浮む世更に有ざりしを、義岑様の御情尊きお僧の御追善。お前の心のやさしくも恨みしつとの念もなく、真実心の御手向ケに地獄の苦しみやう〳〵と、暫くまぬがれ来りたり。今は妬も春の夜の夢の間の暇さえ、冥途の使しげければ暇申さんさらばぞ」といふ間も嵐の吹き来たり、ぱつと燃立火の車、無明の猛火身をせむれば、「アラた

へかたや苦しや」と七転八倒さんらんを、見るにたへ兼初花姫心計はあせれとも、寄に寄られぬ業火のほのほ、身を切りくたく劔の山。せん方泪こなたより走り出たる上生阿闍梨、数珠押し揉んで立向ひ、声を限りの普門品、一心読誦の祈りの印、不思義やこくうに音楽聞へ〳〵花降異香四方に薫じ、紫雲たなびく其中に千手薩埵の御姿光りを放ち顕はれ給ふ。実や火院変成地、念彼観音の力によつて、お船が姿忽に蓮花の上に立よと見へしが、いと嬉しけ成声を上、有難御弔、此山口の観世音の功力に依て忽天ン上の果を得たり。猶も仏力擁護の印。衆生にしめす羽衣の曲狂言綺語も讃仏乗、報恩謝徳と夕月の影も目さまし春霞。

いかにも源内らしく、行文流麗、おおいに江戸っ子の涙を誘ったであろう。再び悪霊となって現じたお舟は劔の山や牛頭馬頭の地獄の責め苦を語る。その地獄のつらさに堪えられるのは、傍線部の「親と一つ所ではない」云々という義岑のあの陳腐な言葉をいつまでも唱えているからである。源内はこのお舟には感情を移入していたのか、晩年にいたるまで徹底的に男の一言を信じきる女性としてお舟を造型している。源内自身は浄瑠璃作者に専念していたわけではないが、鉱山開発やエレキテルに熱を上げていたからといって自身の作り上げたヒロインを忘れなければならない道理もまたないはずである。彼は自身の作り上げたキャラクターをここまで大事にする作家であったことを不承不承ながらも認めるべきではなかろうか。

そして、その無明の猛火に焼かれるお舟を助け出したのが山口観音の亮盛であった。この亮盛の描写も源内の筆が冴えている。

繰り返しておくが、確かに山口観音は新田義貞にちなむ場所だが、山口観音が再興なったのは江戸時代の宝暦年間である。まして、亮盛（上生阿闍梨）は歴史上の人物ではなく、実在人物である。そしてそのことは観客たる江戸っ子は十分承知のうえである。『新田神徳』におけるこの亮盛の登場は、時代設定や構成としてはまったく破綻していよう。荒唐無稽とさえ言ってよい。それでもその無茶を押してでも、この壮絶かつ美しいドラマを描き、江戸っ子の涙腺を緩ませたのが平賀源内の浄瑠璃の世界とその魅力なのであろう。

5　お舟の恋の行方

源内が『矢口渡』で造型したお舟を、彼自身が『新田神徳』でさらに美しく哀れに昇華させた。そのため江戸っ子はこのお舟に心を奪われたようである。その後『矢口渡』の後続作にはお舟に焦点をあてた作品が見られるようになる。その一つが合巻『女船頭矢口之渡』（以下『女船頭』）である。

『女船頭』は二世恋川春町作、歌川国安画、丁亥（文政一〇年）春、文壽堂（丸文）刊行、上下二巻である。表紙には「女船頭矢口之渡場　丸文版」とあり、見返しに「女船頭矢口之渡」とある。春町の緒言に（句読点は筆者）、

夫仙女香のかほりは衣々の艶顔にのこり、忠信義士の噂は浄瑠璃に残る。光陰の矢口もいちはやく、一刻價千金の、春の宵更て暁の、空の白歯に鋏漿つける、由良が計略、南瀬が貞忠。みなふるめかしき時代ものながらも、下手の長老より速が書肆の徳用と、抜本ならぬ丸本を丸抜にして丸文が今年の需に応ずる而已。

と言い、「ふるめかしき」時代物浄瑠璃の『矢口渡』を、しかも「抜

本[9]」ではなく「丸本」から「丸抜き」にしたものが本書であると言うが、それは少し違うようである。

本書と原作『矢口渡』の大きな違いは、その外題に明らかに見られるように『矢口渡』のお舟を主人公にした点である。

そもそも『矢口渡』の主人公は新田家のいずれかであろうが、「時代物」という観点から言えば、実質的な主人公はその新田を命がけで守った由良兵庫か南瀬六郎あたりで落ち着くであろう。ゆえに、この春町の緒言にも両者の名が挙げられる。この両者の「計略」と「貞忠」が語られるのが三段目切「由良兵庫館の段」であって、時代物身代わりとされている。

ところが、お舟の最後は四段目切「頓兵衛住家の段」で語られ、由良兵庫の身代わりと区別して世話物身代わりとされている。

さて、『矢口渡』は本来は浄瑠璃作品であったが、早くに歌舞伎に仕立てられた。歌舞伎としては、三段目と四段目ではどちらが人気があるのであろうか。戸板康二は、

特にすぐれた脚本ではないのだが、お舟が娘役としてしどころの多いとくな役のせいか、上演度数は多く、近年では七代目沢村宗十郎が当り役として型を完成、かなり人気のある狂言になっている。

と四段目の人気を指摘し[10]、廣瀬千紗子も「明治以降今日に至るまで、歌舞伎で際立って上演が多いのは四段目」だと記している[11]。現代では四段目が人気があるのである。それに対して、春町の緒言は三段目に言及している。

どうやら恋川春町のお舟を主人公とする発想は、三段目から四段目に人気の移った世間の動向に関係しそうだという予想がまずは立てられよう。では、三段目人気と、現行の四段目人気との境目はどこであろうか。

そこで『矢口渡』[12]の上演を国立劇場調査資料課作成の年表を参考にしてみると、次のようである。

1　寛政六年八月　桐座　二段目口切・三段目口
2　享和二年四月　京四条南側大芝居　五段続
3　享和二年五月　大坂中の芝居　五段続
4　文化十一年　堺大寺芝居
5　文政三年七月　大坂堀江市の側芝居　大序から四段目
6　文政九年五月　河原崎座
7　文政九年七月　中村座　四段目切

4と6はは上演された段名は不明だが、おおむね三段目は上演され続けたとみてよいであろう。文政十年の『女船頭』序の記述の正しさが裏付けられる。しかし、その転換期はこの文政九年であったらしく、文政九年七月七日の中村座では四段目口切が上演された。三段目ではなく四段目のみが上演されたのである。以降、四段目の上演数が三段目を越えるのは前述の通りであって、してみればこの文政九年の中村座上演をその境目とみなしてもよいのではないだろうか。

『女船頭』は文政十年に刊行されているので、この文政九年の中村座歌舞伎上演を意識している可能性が高い。二世春町という戯作者の嗅覚はいち早く四段目人気の到来を嗅ぎ当て、先取りしたものと考えることができよう。

ちなみに、浄瑠璃の方でも四段目上演が多いが、そちらは大坂での上演が多く、しかも口の「道念庵室の段」というお舟が出てこな

い段の上演が多かったので、お舟を主人公とした『女船頭』は江戸での歌舞伎の影響とみておきたい。

以上のように、『女船頭』は歌舞伎の影響を受けて、女性のお舟を主人公として「丸本（浄瑠璃正本）」を「丸抜き」にして再編成された作品だと断じたいのだが、ことは左様に簡単ではない。『女船頭』は作者が「丸本」から「丸抜き」にしたと明言するにも拘わらず、原作とは大きな違いがもう一点あるのである。お舟が死なないのである（適宜、句読点や用字を改めた）。

台、お舟は義岑の梅と桜の比翼門、開くや運も今この時、頓兵衛は此こと聞くより身の置き所やなかりけん、いづくともなく逐電逐電せり。悪人のこらず根を断ちて、善人天下にはびこりつゝ、枝も栄ふる松の春、のこるかたなくめでたし〳〵。

お舟は生き延びて恋敵の台とともに義岑に仕え、それを知った父の頓兵衛も身を恥じて逐電して生き残ったという結末が『女船頭』では用意された。まさにお舟の一途な恋は成就し、めでたしめでたしという結着である。

このお舟のハッピーエンドには少なからず歌舞伎におけるお舟人気が影響を与えていることは前述の通りであるが、そのお舟像の変遷の中に『新田神徳』を置いてみたい。お舟に肩入れした『神霊矢口渡』の後年の新理解は、すでに『新田神徳』において胚胎していたとみるべきではなかろうか。お舟蘇生については、『新田神徳』が先鞭を付け、それを歌舞伎が受け継ぎ、『女船頭矢口之渡』のような亜流の追随作を生んだと捉えることが可能である。その意味では、『新田神徳』は決して看過される作品ではなく、再評価されてしかるべきであろう。

どろどろと山口観音に幽霊となって現れ、亮盛に成仏させられたお舟の愛と妄執が描かれた、源内生前最後の演目『新田神徳』は時代を先取りしていた傑作として改めて評価が与えられるべきであろう。その評価は同時に「江戸っ子」の見巧者ぶりにも新たな光を当てることになるであろう。

注

(1) 福田安典「平賀源内『神霊矢口渡』について―福内鬼外論序説―」（『日本女子大学　紀要　文学部』第六四号、平成二七年三月）、「浄瑠璃作者・平賀源内」（国立劇場パンフレット、平成二七年十一月歌舞伎公演）参照。

(2) 福田安典『平賀源内の研究―大坂篇』（ぺりかん社、平成二五年）

(3) 池山晃「平賀源内と江戸の劇界」（『江戸文学』、二四号、平成十三年十一月）

(4) 『日本文学大辞典』（新潮社、昭和三十年）、城福勇『平賀源内の研究』（創元社、昭和五一年）。

(5) 清水谷孝尚『板東観音霊場記攷』（金聲堂、昭和四十七年）、栗原仲道『法印亮盛の生涯　板東観音霊場記　その人と生涯』（私家版、昭和四十二年）。

(6) (1)参照。

(7) 国立劇場上演資料集（５１２）『神霊矢口渡』（平成二〇年六月）。

(8) (7)と同じ。

(9) 抜本については廣瀬千紗子「『神霊矢口渡』小考」（『江戸文学』二十四号、平成十三年十一月）に詳しい。

(10) 戸板康二「神霊矢口渡」(7)と同じ）。

(11) 廣瀬千紗子「『神霊矢口渡』の三段目」（国立劇場パンフレット、平成

二七年十一月歌舞伎公演）。

⑿「「神霊矢口渡」上演年表」（⑺と同じ）。

受贈雑誌（一）

愛知教育大学大学院国語研究
愛知教育大学大学院国語教育専攻
愛知県立大学説林
愛知県立大学国文学会
愛知淑徳大学国語国文
愛知淑徳大学国文学会
愛知大学国文学
愛知大学国文学会
青山語文
青山学院大学日本文学会
歌子
実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科研究室
愛媛国文研究
愛媛県高等学校教育研究会国語部会
愛媛国文と教育
愛媛大学教育学部国語国文学会
大妻国文
大妻女子大学国文学会
大妻女子大学紀要
大妻女子大学
大妻女子大学草稿・テキスト研究所研究年報
大妻女子大学草稿・テキスト研究所
岡大国文論稿
岡山大学文学部国語国文学研究室
お茶の水女子大学国文
お茶の水女子大学国語国文学会
香川大学国文研究
香川大学国文学会
学芸国語国文学
東京学芸大学国語国文学会
学習院大学国語国文学会誌
学習院大学国語国文学会